Faculty of Letters

# 文学部

文学部生の

## リアルな！学生生活 vol.26

5

文学部生のリアルな学生生活の様子を掲載し、ご父母の皆さまに文学部生の充実したキャンパスライフの風景、また文学部ならではの取り組み等の情報を発信いたします。

# 中央大学で歩んだ、激動の学生生活

佐野（さの） 友紀（ゆき）
文学部人文社会学科英語文学文化専攻４年
私立中央大学附属高校（東京都）出身

常に全力で駆け抜けた10年間

### 第1期生としての中学時代

私は、中央大学に附属中学ができて最初の卒業生です。２０１０年４月、中央大学附属中学校に第1期生として入学しました。上級生も下級生もいない「自主・自治・自律」の校風のもと、個性を生かす教育を受けてのびのびとした学校生活を送りました。何一つ前例がないため、一人ひとりがパイオニアとして学校行事に臨み、白門祭、体育祭、修学旅行、合唱コンクールなど、学校行事の前にはそれぞれの委員会メンバーが連日話し合いを重ね、どうしたら生徒全員にとって意義のある行事になるかを考えました。

そのようななか、私は初代の文化祭委員長と修学旅行委員長を務めました。どんな些細なことでもこれからの伝統の礎になるため、さまざまなことを慎重に決定していくことで責任感が芽生え、常に手探りの状態でしたが、とても充実した日々でした。特に修学旅行委員会で新幹線での昼食を慎重に決めたことは思い出深いことの一つです。また、学年が上がり後輩が入ってくると、午前中で終了していた体育祭が夕方まで白熱するなど行事の規模も大きくなり、学校生活はより一層楽しいものとなりました。

### 暗黒の高校3年間

２０１３年４月、私は中央大学附属高等学校に進学します。部活動のチームロゴ入りバックを肩からさげ、メイクバッチリでイーストボーイのなんちゃって制服に身を包み、中学時代から憧れていたソングリーディング部「FAIRIES」に入部します。しかし、派手なイメージとは違って部活動は厳しく、朝練・昼練・放課後練と大会に向けて練習漬けの日々でした。高校1年で全国1位となったものの、それ以降は成績が振るわず、高校3年最後の大会は6位と惨敗。日々の練習のなかで何度も話し合いがあったにもかかわらず、部長・副部長ではない自分が意見を言うことに躊躇し、自分の殻に閉じこもってしまいました。そんな自分の不甲斐なさが悔しく、同期にさえ心を開かない、冴えない暗黒時代でした。

### ONE TEAM

２０１６年４月、私は中央大学文学部に進学します。FAIRIESで6位という不甲斐ない成績、自分の思いをダンスにぶつけられなかった悔しさを払拭したい想いで、同じソングリーディング部「Garnet Girls」に入部します。

２年生になったとき「必ず1位になる」と公言して部長に就任。強豪校に勝つため「守らない、攻める」をモットーに「全国大会優勝」という目標を掲げました。チーム全員がすべての時間をGarnet Girlsに費やし、つらく逃げ出したいときも、優勝すればすべ

うれしいときもつらいときも常に一緒にいたＧＧの同期

自分たちでつかんだ、念願の全米大会出場

てが報われると信じて練習に励みました。全員が本気だからこそぶつかり合うこともありましたが、そのたびに話し合って限界を超える練習を重ね、徐々にチームが一つになっていくのを感じました。

結果、国内大会では体育大学も含まれる5大会中、4大会で優勝。チアダンスの本場である全米大会では2位と健闘しました。努力が報われたのだと思います。優勝だけにこだわり、一丸となって切磋琢磨した日々は、私にとってかけがえのない時間になりました。私を支えてくれた同期や後輩たちは私の誇りであり、この先も大切な仲間です。

## 未来への挑戦

3年次の8月、部活動引退と同時に大学の単位取得のため毎日大学へ通い、さらに公務員の道に進むことを決めて専門学校とのダブルスクールを開始しました。

さらに4年生になると、これまでのダンス漬けの皺寄せが一気に押し寄せました。卒業単位の取得に加え、2年次から履修していた教職課程の教育実習が6月から始まり、土日の公務員試験との両立に悪戦苦闘の日々でした。

教育実習中は中学校で英語の授業を担当しました。授業の準備はもちろん、学校行事や委員会などの会合、保護者や地域との連携、部活動の指導など仕事量は膨大で、生徒と向き合う時間が限られてしまっている「教師」という仕事のジレンマを目の当たりにしました。そこで、私は教師を支える仕事がしたい、学校現場における潤滑油のような存在になりたいと思い、教育行政職員になることを決意しました。

この10年間、中央大学で思いやりのある先生方の指導や友人たちに恵まれ、日々全力で学生生活を駆け抜けることができました。卒業後は、就職説明会の際に職場への想いを熱く語ってくれた職員の方々とともに仕事をしたいと思いました。そして、新しい環境で自らを成長させるべく、地元埼玉を離れ、佐賀県庁教育委員会に入庁します。何年後かに中央大学の先生方にどんな土産話ができるか、今からワクワクしています。

練習前の円陣

---

From the Faculty of Letters

文学部だより

## 共同研究室の活用

文学部事務室
齋藤（さいとう） 優里花（ゆりか）

ご父母の皆さま、初めまして。2019年7月1日付で文学部事務室に配属になりました、新入職員の齋藤優里花と申します。学生時代は他大学の文学部で英米文学を学んでいました。卒業後に中央大学の文学部事務室で働くことになり、同じ文学部でも大学によってここまで環境が異なるのだと驚く日々です。

なかでも文学部事務室に着任してから驚いたことの一つが、共同研究室です。出身大学では中央図書館でしか本を借りる手段が無く、専攻単位での図書は多くありませんでしたが、本学には専攻ごとの共同研究室があり、各専攻の本、特に原書が豊富に所蔵されています。文学部ではレポートを作成する機会が多く、4年次に卒業論文を執筆する学生も多いです。その際に共同研究室に行けば、参考文献として専門の図書をたくさん読むことができます。また、専門的な資料だけでなく、パソコンや演習スペースを使って自習やグループでの学習も可能なため、わからないところを友達と教え合う学生もいます。

そして、学習だけでなく、学部生・大学院生・教員の交流の場としても共同研究室は利用されています。先生に質問しに来たり、友達との話を楽しんだり、先輩に履修や就職活動の相談をするなど、人によって使い道はさまざまです。研究室内には室員という常駐のスタッフも居るため、専攻でわからないことがあれば気軽に聞くこともできます。このようにアットホームな雰囲気で気軽に相談や質問ができるところも、共同研究室の魅力の一つです。

文学部といっても、大学によって雰囲気も教育体制も大きく異なります。本学には専門分野を深め、アットホームな雰囲気のなかで学ぶことができる共同研究室があります。少しでも興味のあるご子女には、ぜひ利用を勧めていただけますと幸いです。